

まえがき

初めてまえがきを書くことになりました、現代視覚文化研究会会長のフランカーです。肩書きを含めると長くなってしまっているので現代視覚文化研究会を略した、現視研のフランカーとお覚えください。

ここまで読んでいただいた皆様、改めましてはじめまして、2015年最後の会誌となる冬会誌へようこそ。このまえがきでは自分が思う現視研の魅力を語り、ワクワクしながら作品を見ていただこうと思っています。

まず大きな魅力として、名前がかっこいい！ 現代視覚文化研究会所属、こう書くことも肩書きがかっこよく見えると思います。……すいません冗談です。ですが私は作品を書く上ではこのような気持ちを大切にしています。

気持ちを率直に口に出すことを恥ずかしいと感じる人は大勢いると思います。私が常日頃思うこととして、創作活動の上では自分の創り出すものに気持ちを込めることは重要なことであり難しいことであると私は考えます。そしてなによりも難しいのは文字、色、絵などで自分の気持ちを目の前にいない相手にわかってもらうこと、共感してもらうことです。その過程で相手になにか影響を与えることができればそれはとても素晴らしいものであったと言えます。

創作活動とは他人のためにするものではありません、自分のためにするものです。だからこそ自分の気持ちが最も重要なのです。現視研部員全員がそれを得意としているわけではありません、しかし、お互い作ったものを見せ合うのはとても楽しいものです。

今度はもうちょっと楽しそうな魅力を語りましょう。現視研は元々いくつかの部活が合体してできた同好会だそうです。現視研の前身たるTRPG同好会(だったはず)やその他の同好会の遺産として、

クトゥルフ神話のルールブックや、様々なボードゲームが我が部にはあります。ちょっとした創作活動の息抜きとしてそれらで遊んだり、TRPGでは逆にストーリー作りに疲れたり……。

次の春会誌では新入生の皆様に直接手渡してるときを心待ちにしています。それでは皆様、2016年度最後の会誌、冬季会誌をどうぞお楽しみください。

情報工学科二年

フランカー

目次

小説

3 よくあるお話
若葉

8 二悪人

TEXTER

12 いじめられっ子
フランカー

14 旋律一奏、捧ぐは何故に
小刀

イラスト

18 猫にゃん

19 まっすん

20 ちげ

21 ナカシマ

よくあるお話

若葉

キーンコーンコーン、と授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。委員長が号令をかけ、生徒たちは頭を下げる。

「起立！ 礼！」

そして先生が教室を出たそのとき、教室は一気に騒がしくなった。「やっと終わった〜」

「明日から長期休暇だ！」

そう、明日から冬休みだ。

生徒たちは遊ぶ予定を組む、早足に教室を去るなど、思い思いに行動する。

俺、宮原 大智^{たち}は後者である。授業中に密かに不要な教科書を鞆に仕舞っていた俺は、チャイムが鳴った瞬間広げていた教科書とノートを鞆に押し込み、それを持つてすぐさま教室を出ていった。

俺がそこまで急ぐ理由は、人を待たせているからである。

階段を駆け足で下り、待ち合わせ場所へと向かう。以前はたった五秒の遅れで口うるさく注意されたこと。あのときは大変だった。

走るなど書かれた貼り紙を無視して廊下を駆け抜ける。先生はみな職員室にいたので咎められることはない。

「あと十秒……！」

待ち合わせ場所である天文部の部室まであと少し。俺は全力で走り、扉を開け放った。

「二秒前……ギリギリだね。感心しないな」

そう苦言を呈するのは、ぼつと見中学生に見える少女だ。平均よりも二十センチは低い身長、細く白い手足、そして何よりも目を引くのが背中で揃えられた白い髪。触るだけで折れてしまいそうな儂い印象を持たせるこの少女は、なんと俺より歳上である。

少女は足を組みパイプ椅子に腰掛けていた。通常よりも短く改造されたスカートは少女を守るには些か無用心だが、慣れとはおそろ

しいもので、今では特になんとも感じない。

「いやなんで悠然と座ってるんですか、浦白先輩」

「授業に出ていないからさ。無言で出ていっても病欠になるからね」

浦白 水樹^{みづき}。

大手企業のご令嬢で、成績優秀な少女だ。ただ、生まれつき体が弱く、入退院を繰り返している。最近では体調が良くなりつつあるらしく、こうして高校に通うことを許されている。

見るからに高そうな黒塗りの車で登下校を行い、移動教室が免状されているという状況で目立たない方が無理があるというもので、入学当初はかなりの目を引いたらしい。

間違えても俺みたいな一般人が相手ではないのだが、何故か俺はこのお嬢様に気に入られてしまったようで、無理矢理天文部に入部させられ、毎日来るよう命じられている。それも、授業が終わってから五分以内に、だ。五分あれば充分だと思うだろうが、そうでもない。俺の教室は本館三階の最北端に位置するのに対し、天文部室は別館一階の最南端。さらにこの学校は学年が上がっても教室の変動がないため、二年間毎日長距離を走らされているのだ。

「そもそも授業のレベルが低すぎる。聞く価値なんてないよ」

「一応偏差値六十五の高校なんだけどな……」

「偏差値なんて関係ないさ。僕にとつては例え偏差値八十の高校でもこう感じるだろうね」

「それは言い過ぎじゃないですか？」

「はあ……」

浦白先輩は呆れたようにため息をついた。

「まあ、そんなことはどうでもいいんだ。それより、今日の夜九時にここの屋上に来ること。いいね」

「え？ 急にどうしたんですか？」

「いやね、顧問の先生がそろそろ天文部らしいことをしろ、と言ってきたんだよ。それを延ばしに延ばし続けた結果、今日やれと直接言われたのさ」

「だから天体観測をする、と」

「そうだよ。まあそれでも勉強はするけどね。宿題はやってきたかい？」

「一応やりました」

「そう言つて俺は一枚のプリントを取り出し、浦白先輩に差し出した。」

「一応は余計だ。やったのならやつたでいいだろう」

浦白先輩はそう言いながらプリントを受け取り、目を通す。そしてすぐに眉をひそめた。

「もう冬休みだからといつて気が抜けたのかい？ 二ヶ所、初歩的なミスをしているよ」

間違えた問題を指で指しながら嫌みつたらしく指摘する。そこには小難しい計算問題がズラリと書かれており、見ているだけで頭痛を起こしそうになる。細かくは見えないが、先輩がそう言うのなら間違えているのだろう。

「ほら、机を用意して」

俺は言われた通りに、壁に立て掛けられている脚を折り畳めるタイプの机を運び、組み立てた。こたつから布団を取つ払つただけのものなので、浦白先輩は椅子から降りてあぐらをかく。俺はその向い側に座り込んだ。

「さて、早速だがこの二問をもう一度解いてみようか」

俺は鞆からノートを取り出し、シャープペンシルを取り出した。

「お疲れ様。今日はこのくらいにしておこうか」

「うああ……」

浦白先輩がそう言った瞬間、俺は後ろに倒れこんだ。

「なに情けない声をあげてるんだい？ まさか、たつたこれだけの勉強で限界が来たというわけではないよね？」

「三時間はたつたと言えないと思いますけど……」

「一日は二十四時間もあるし、一年なんて八千七百六十時間もある。」

「そう考えると三時間なんて短いものだろうか？」

「そんなこと言われたところで……」

人は三時間ぶつ通して集中できないんだよ、と愚痴をこぼしそうになるのを抑える。言い返しても無駄なことはよくわかつていた。

「この僕が教えているんだから、冥王大学にだって余裕で合格しないとな」

冥王大学。日本最難関と言われる大学で、ここを卒業できた生徒は必ず歴史に名を残せるとまで言われているが、並の学力では合格なんて夢のまた夢である。さらに、退学率が八から九割を越える、超ハードな大学である。

浦白先輩は当然のように冥王大学を受験するという。俺なんかは構つていていいのかと聞いたことがあるが、「君は自分の心配をしろ」と一蹴された。

「そんな簡単に合格できるわけがないですよ」

「何を言うんだい？ 全ての問題を完璧に答えれば合格できるだろう？」

それができれば誰も苦労しないんだよ、と思つた。

「まあ、それができればいいんだけどね。一筋縄ではいかないかな」

俺は目を見開いた。あの浦白先輩が一筋縄ではいかなんとはどれほどなのか。

俺の反応を見た浦白先輩は不機嫌そうに呟いた。

「……僕が不安なのは君の合否だよ」

「あ、はい」

「僕が落ちるわけないだろう」

ジロつと睨み付けられたが、怖くはない。むしろ可愛ささえある。浦白先輩はため息をついた。

「冥王大学の受験日は年が明けてから一週間後だ。不安や緊張はあるけれど、それでも君の勉強は見るからね。明日以降も毎日ここに來ること。時間は午後一時だ」

「受験勉強しなくていいんですか？」

「僕はあるからいい。でも君は受からない可能性が高いからね。少しでも知識を詰め込まないと。あと一年しかないことだしね」

大した自信だと思ふ。しかし、それは慢心ではなく確信だろう。

「ずいぶん話し込んでしまったな。家まで送らせようか？」

「いや、大丈夫ですよ。すぐ近くですのよ」

「そうか。まあ、流星に今晚は送らせてもらうよ。かなり寒いだろうし」

「そういえば俺、天体観測用の道具なんて持ってませんよ？」

「それは心配しなくていい」

「そうですか」

また後で、と言って浦白先輩は部屋を後にした。俺は戸締まりを確認して鍵を返し、帰路についた。

「二秒前……君は学習しないな」

夜の九時。浦白家の使用人の案内を受け、俺は屋上に来ていた。本来なら施錠されているはずなのだが、普通に開放されていた。

「結構急いだんですけどね……」

「……まあ、間に合っただけはいいし、良しとするか」

浦白先輩はそう呟いた。

ふと、周りを見渡すが、天体観測するための道具が見当たらない。どういふことかと浦白先輩の方を見ると、彼女は顔である一点を示した。そこにはブルーシートが置いてあった。

「まさか……」

「ほら、早く敷かないか」

予想の斜め上を行っていた。てっきり先輩が持ってくるものだと思っていたが、まさか何も持ってこないとは。

「はいはい……」

「はい、は一回だよ」

はいはい、と心のなかで呟きながらブルーシートを広げる。そして飛ばないように靴を脱ごうとすると、浦白先輩が「そこに座るんだ

から抑える必要はないだろう」と言った。

「よいしょっと……」

浦白先輩はブルーシートの上に座り込み、そして仰向けに倒れこんだ。

「ほら、君も早くしなよ」

そう言われ、俺も先輩の隣に倒れこむ。頭が少し痛いな、と感じたとき、先輩が丸めたタオルを投げてきた。俺はそれを頭の下に置いた。

空は満天の星空で、とても綺麗だった。雲ひとつなく、多くの星が自己主張するかのように光輝いている。

「多過ぎてどれがどれかわからないですね……」

「君と一緒にするな。まずあれがシリウス。地球から観測できる恒星で二番目に明るい星だ。そしてあれがオリオン座だから左上の星がベテルギウス、そしてあれがプロキオン。この三つで構成されているのが、かの有名な冬の大三角形だね」

浦白先輩が指差しながら解説をする。俺は静かにそれを聞いた。

「……あ……がと……」

「え？」

「な、なんでもない！ ほ、ほら！ あれがアルデバラン、そしてあれらで牡牛座が構成されていて……」

途中で何か言ったようだが、聞こえなかった。聞き出そうにも話を反らされ、まあいいかと話を聞く。

そのとき、空を指す浦白先輩の手が少し赤くなっていることに気付いた。俺は先輩の手を掴み、そのままゆっくりと下ろした。

「ひゃっ!？」

可愛らしい声が響いた。隣を見ると先輩は顔を赤らめながらこちらを見ていた。目が合うとさらに赤くなり、向こうをむいてしまった。

いや待てなんだあの可愛い生き物は。

王大学に入学させたいらしく、「君には絶対に受かってもらうからね」と息巻いていた。

その一年後、俺は無事に冥王大学に合格した。

とんでもなく平凡で普通な俺は、どこでどう間違えたのか、天才お嬢様と付き合うことになった。それによつて、俺にとつては雲の上だった冥王大学に合格したのだから、人生何があるかわからないなと思う。

けれど、何があつても彼女と共にいようと思つた。

了

二悪人

TEXTER

悪人。

読んで字のごとく、悪いことをした人のことを指す。

悪人は二種類ある。

自分が個人的に悪いと思っているか、何かしらの決まりで悪いとされているか。

そして、その両者が必ず一致するとは限らない。

「今日はお祭りよ！ 始まりの合図を！」

声を響かせるのはこの国の王女だ。姫とも呼ばれる。

可憐だがよく通る声は、王城前広場に集まったぎゅうぎゅうの国民の多くにその内容を届ける。

一国のお姫様らしいドレスを身にまとい、王城の二階の窓から声を張り上げる。

マイクは持つていないが、電気を用いないタイプの簡単な拡声器を持つている。

王城前の広場の国民たちは大歓声をあげて、広場の中央のちよつとした高台に居る俺のほうを見上げる。

曇りのない、期待に満ちた表情だ。

まるでこれから起こる惨劇を普通だと思っっているような表情だ。いや、実際にそう思っっているのだろう。

背中を冷や汗が伝う。軽く動悸がする。

でも、俺には既に選択権などないのだ。

表情を心中と正反対の笑顔に固定すると、後ろを振り向く。そこには、一人の死刑囚が微塵も動けないような状態で拘束されている。

表情は俺からは見えない。声も聞こえない。だがそれはありがた

い。感情を押し殺しながら、そばにおいてある斧を手取る。

ずつしりと重みを感じる、両手でないと持ち上がらないような大きな目の斧だ。よく研いであって、万物を切り裂けそうな印象さえ抱かせる。

それを持ち上げると、構える。

高く上った太陽に刃がきらめく。

そのまま風を切り、死刑囚の頭を切り落とした。

落ちた頭が鈍い音をたてる。

それだけだ。それだけである。

赤い液体が首から噴き出し、地面の石畳を汚してゆく。

俺は血のついた斧をその場に置き、国民に手を振って応える。

大きな後悔の感情が新たに生まれる。

自分は大変な悪行を為した、その後悔である。

視界の端に映った死人の頭は、口を封じられたその顔は、視線で

人を刺し殺すような形相を浮かべてこちらを見ている。

気温も二十度を超え、さらに日光も遮られることなく降り注いでいるというのに、俺の中を北風が通り抜けた。

「お疲れ様」

「ああ、なんてことないさ。ありがとう」

高台を降りて、広場のふちに沿って並んでいる屋台やイベントに

国民が散らばってゆく。

その中で唯一待っていてくれた人、俺の親父はねぎらうように笑顔で俺の背中をたたいた。

「しかしお前が今年の国民祭の開会者選ばれるとはな。実に名誉なことだ、父としては嬉しいぞ！」

「俺も言われたときは本当にびつくりした。でもなんとか無事について良かった」

開会者は年一回のこのお祭りを開始する儀式をする人のことだ。

毎年国民の中から身分関係なく抽選で選出されるのだが、今年

俺の家にその葉書が届いたのである。

親父がそれを小躍りで俺の元に持ってきたときは、時間が止まったかと思うほどのショックを受けた。

そう、ショックだったのである。

俺はこの儀式が非常に、非常に嫌いだったのだ。

苦手なのか嫌いなのか。それははっきりしないところではないが、とにかく直視したくないというレベルでは拒絶していた。

「しかし立派になったなあ」

「そんなことないぞ。まだ家族と暮らしてるし、学校通ってるし……」

「もう来年になったら卒業するだろ、大人と同じだ」

そう言っただけで親父はまた笑った。子供のころから変わらない、親父らしい笑い方だ。

俺たちは適当な会話をした後、お互いに好きな所に行こうと言っただけで別れた。

広場はテニスコートが二面くらい丸々入るくらいの円形。そこに並んでいる屋台やイベントでは、有名店の出張事業所から庶民の家庭料理を趣味レベルで販売している者までたくさんの種類が並んでいた。

とりあえず、これだけ人が居れば食べ物屋台が混むのは分かりきっているから、適当な店に並び、昼飯を確保することにする。

「いらつしやい！ って、開会者のお方じゃないか！ おめでどう、安くしとくよ！」

「……んじや、海鮮焼き一つ」

「あいよ、端数切り捨てて三百円だよ」

人柄の良さそうなおっさんは汗を首のタオルで拭いて、奥手の者に指示を出す。

どうやら接客と調理を分けているようだ。

狂っている。

どう考えても、あの儀式は狂っている。

人を殺すような儀式を見慣れるところか、喜びさえ感じる国民に俺は多大なる恐怖心を持っていた。

今回は死刑囚だった。

でも、死刑囚が居ない時はスリのような軽犯罪囚を使うこともある。善良な国民のときもある。

そんな、何十年も続けられているという儀式に、俺は理不尽に殺されるんじゃないかという言い知れぬ強い不安を感じたのである。

それは当然の不安であるはずだった。

でも、俺以外の家族は、国民は、まるで全く不安を感じていないかのように日々を過ごすのだ。

これで感情を隠して生きていると言われたらそれは人間の為せる業ではない。

完全に孤独になったような気持ちがする。

ずっとそうだ。いつもこの祭りのときは心が苦しい。

今年は俺が執行したのだからなおさらだ。

俺がおかしいのだろうか？

いや、そんなことはないだろう。

世間知らずの俺だが、この国以外のどこに諸兄で快樂殺人が行われる場所があると言うのだろうか。

だが、俺にはどうしようもないのだ。

家は多少裕福とはいえず、庶民の中の一家にすぎない。

しかし。そう考えて、俺は考えるのを止めた。

考えたって仕方がないのだ。いくら考えても無駄なのだ。

だから、この心のつかかりは無視するしかないのだ。

「……大丈夫か？ 怖い顔してるぞ」

海鮮焼きを差し出したおっさんが心配した顔でこちらを覗いていた。

一気に我に返り、懐から直に入れてあった硬貨を出し、薄い木製容器の海鮮焼きを受け取る。

後ろには列ができており、広場の日時計は正午を指し示していた。と、その時広場の入り口付近、階段の所で何か騒ぎが起こっていた。

そこにはイベントは設置されていない。違法営業か、しかし、こんなお祭りには衛兵がたくさん待機しているのにそんなチャレンジャーな奴はそうそう居ない。

気になった俺は完全に観客気分で見に行こうとしたが、その足は途中で止まった。

そこで起きていたのはまさに虐殺としか言えない光景だった。

ただの無実の庶民が何人も首を刎ねられて転がっている。どの顔も苦痛に歪んでいる。

立ち向かおうとしたのか、その中央に斧を持って佇む男に向かって倒れている人ばかりだ。

返り血を浴びているその男は普段着の上に革のズボン、革の胸当て、何らかの金属の仮面を付けただけの装備だ。

にも関わらず卓越した技術で庶民や衛兵の攻撃をかわし、反撃し、周囲の野次馬を巻き込んで死体を増やす。

反乱というよりは通り魔、そちらに近かった。

野次馬は最初、なんだなんだと興味本位で近寄っていたが、無抵抗の野次馬が巻き込まれだすと途端に怯え、我先にと散り散りに逃げ出す。

代わりに衛兵が一人、また一人と駆けつけるが、何人が束になっても彼に敵わない。

彼はそれほどの戦闘力を持っていた。

男は衛兵を手持ちの斧でどんどん吹き飛ばすと、続いて野次馬を明確に狙って斧を振るい始めた。

既に怖気づいた民衆は逃げ去っているが、元々人が多すぎたために、人ごみに阻まれて避難できない人々があつという間に血祭りにあげられていく。

心なしか、彼は笑っているように見える。戦闘狂だ。あるいは快樂殺人者だ。

彼は見境なく周囲の人を殺すだろう。実際にそうしている。俺も逃げなければ。

斧の反射する光が目に入る。

間もなくして、風切り音が耳に入る。

追いつかれたか。

そう思い、振り返ると、あと数センチのところで斧は停止していた。

この男が何を思ったか、直前で止めたようだ。

斧の先端は震えすらしていない。斧を自分の意思でしっかりとコントロールできているのが伝わってくる。

「お前は悪人じゃない」

男はここに来て初めて、声を発した。

戦闘中は一切喋らなかつたのに。俺はこの殺人者の言葉に耳を疑った。

「お前は悪人じゃない。目を見れば分かる」

男の声、先ほどと同じ台詞が、追加情報を伴って再び耳に入る。

その声は多少息が上がっているが、はつきりとした口調で俺に話しかけている。

意味が分からなくて、つい感情のまま返答した。

「何を言っている。俺は悪人だ。見ていただろう、皆の前で人の首を切るのを」

言った瞬間しまったと思った。

ここで生きたいなら、あれは正当化しなければならなかつた。

それがこの国ではルールであり法なのだ。

明らかかな失言。きつと殺されるだろう、そもそも目の前のこいつは善人と悪人の区別をつけずに殺しているはずなのだ。

話が一瞬でも通じただけ良かった。

最初から逃げていれば良かったのだ。

しかし男は愉快そうに笑った。

「馬鹿いえ。あれを殺人だ、犯罪だと感じるようなやつは貴様しか見たことない。」

自分が悪人だと言うのなら自分の罪を悔いて償うが良い。

だが、自分が悪人だと思ふ奴がそこに居るのなら償わせてみる」

そう言つて彼は俺に斧を投げてよこした。

サイズにしては軽い斧だ。しっかりと鍛えていないと先ほどのように首を両断などできないだろう。

「それはブレゼントだ。俺は広場中央に置きつばなしの斧を取つてくる。」

自分に自信を持って。悪人は目の前に居る」

そう言つと男は身軽に人々の間をすり抜けると、あつという間に広場中央まで到達し、俺が今日使つた鋭くて重い斧を片手で持ち上げた。

振るだけで衝撃波が発生し、それだけで十を超える人の命が散る。それを俺は他人事のように眺めると、手の中の斧を握りなおした。衛兵がこちらに駆けつけてくる。

例の男に戦力を割いているのか、こちらに来るのは二名だけだ。

銀に光る軽量の全身鎧を身に付け、細身の剣を携えて、こちらに駆けつけてくる。

普通に考えれば勝てるはずがない。

俺は斧に関して、いや戦闘に関して素人だ。

斧を振り回すだけならすぐに斬られて死ぬだろう。

だが、俺はこの期に及んで余計な心配をしていたことに気が付いた。

そのことに気が付き、傍から見れば不審極まりない笑みを浮かべる。

俺は大変な悪人だ。

だから、理不尽に殺される心配だけはないのである。

俺はその笑みを隠そうともせず、軽い斧を両手で構えた。

周囲の民衆は相変わらず、自分たちの不幸を嘆きながら逃げ惑っていた。

了

いじめられっ子

フランカー

「なんで、どうして僕ばかり」
皆急に僕のことをいじめ始めた、一年生の時はこんなことは無かったのに。

新しい優しい女の先生が来て、皆には内緒にしているが彼女は親戚でとても仲がよかった、これからもつと楽しい高校生活を送れると思っていたのに……。

最初は机の上に白い花が置かれていた。なんなんだこれは！と声を張り上げてみだれも答えてくれなかった。次に何人かの無視から始まった。それでも何人か話してくれる子はいだし、特に気にも止めていなかったけど、数日もしないうちにぼくに話しかける子はいなくなり、近寄ろうとすらしなくなつた。

誰がみんなをそうさせているのか、それもわからない。でも先生だけは――

「……あれ？ まだ帰つてなかつたの……ちよつと！ なんて泣いてるの!？」

先生が来た。いつのまにか泣いていたみたいだ。目元をゴシゴシとぬぐつて言った。

「な、なんでもないです！」

「なんでもないって……そんなわけないじゃない！」

何があつたの？と聞いてくる。ああ、この人だけは本当に僕のことを心配してくれているんだ。するとおずおずとこんなことを言い出した。

「……こ、ここじゃ話しにくいなら、私の家に来る？」

「へ!？」

変な声が出てしまった。混乱する思考をまとめてとりあえず断ろうとしたが、

「せ、先生そういうのは……」

「そ、そうだよ、まずいわよね」

と悲しそうに書類をまとめだしてしまつた、悪いことをしてしまつただろうか。

「や、やっぱり行かせてもらつていいですか？」

「ほんとに!？」

ということまで来てしまつた。学校から先生の車で送つてもらつた……どうしよう。あの時の僕は何を考えて了承してしまつたんだ。

「もういいわよ」

頭を抱えている僕に、家を掃除していた先生が呼びに来た。

「お、お邪魔します」

心臓がバクバク鳴っている。なんでこんなにドキドキするんだろう。まさか僕は先生に……。そんな思考を頭をブンブンと振つて振り払う。

「じゃあ……話してくれる？」

最初はポツリポツリと、途中からは無我夢中で話した。途中から泣いていた気もする。とにかく全部話しきつた。話し終えると、無言で先生が僕を抱きしめてくれた。

「辛かつたね……気付いてあげられなくてごめんね……」

先生も泣いていた。僕の為に泣いてくれていた。僕も先生の胸で泣き続けた。

ひとしきり泣くとこの状況が無性に恥ずかしく感じられてきた。

「そ、そろそろ……」

「あつ！こ、ごめんなさい」

「いえそんな」

なんだろうこの空気、僕はどうすればいいんだ。胸が耳をふさぎたくなるほどバクバク鳴っている。何か話すべきなのだろうか

「えつと!」

「は、はい!」

「つ、辛いことがあればいつでも来てくれていいから、ね？」

その時僕の顔の変化をあらわすなら、ボンツ！ という音を立てて真っ赤に変わったことだろう。僕が頷いて了承すると、先生も顔を真っ赤にしていた。

「じゃあ、家まで送るわね」

その日はそのまま家に帰った。また学校に行くと憂鬱になるが、先生がなんとかしてくれるはずだ。ああ、先生がいてよかった。先生さえいれば、僕は――

「ねえ、あなたたちもこの手紙が来たの？」 「お前もか？ どうやらクラスの全員に回っているみたいだな」

『白い花が置かれた席の生徒を全員でいじめろ』

「話しかけた子は、自宅の写真や名前が書かれた手紙が送られたらしい」「いったい誰がこんなことを……」

と、いうわけだ。途中まで怖くない！ と思ったかもしれない。誰が手紙を送ったかわかるかな。誰が得した？ 誰なら生徒の自宅や名前を調べて脅迫できる？

まあ、知らないほうが幸せなこともある、ってことだね。

了

旋律一奏、捧ぐは何故に

小刀

「退屈だ」

朝の祭事を終え、すっかり無人となった大聖堂。その壇上で俺は一人、朝の礼拝でも世話になったピアノを調律している。調律とは言ってもコイツを扱う人間は俺以外に数人いるかいけないかだ、自分好みに音色を調整しておけば事足りる。どうせ微妙な違いなんざ誰も分からない、手を抜こうとは思わんがそこまで徹底する必要もないだろう。

「しかしこの後どうすつかなあ」

白鍵の半分ほどに差し掛かったところで声が漏れる。教会に懺悔室って部屋があるのは有名な話、身分やらを隠して悩みの相談や罪の暴露を出来ることで知られてるだろう。普通の教会はあつて三室か四室、日替わりで持ち回り立ち回ってるらしいが……何故かここはそうじゃない。月に一回、部屋を二十も三十も用意して

「些細なことでも相談どうぞ」みたいな行事を開いている。そりゃ街の中心に建ってる大教会、地域の人と付き合ひするのが重要つても分かるが。

「さーとと」

一通りの調律を終え、音の確認がてら二曲弾いてみる。気軽に弾けるミサ曲と聖歌、何十回も演奏して慣れてる分、楽譜を読むどころか先を思い出す必要もなく指が勝手に動く。普段の演奏と何ら変わりなし、調律終了……と心中で呟いた瞬間、聖堂の扉が開く。

「……」

入ってきたのは金髪少女、年は大体十四から十六くらいか。懺悔に向かった連中と比べずとも、身なりが整ってるのは分かる。大方貴族の娘か、その割に付添人もなく一人でいるのが気になるが。まあ今日来る理由と言えばアレくらいだろう、壇上から降りて入口に向かう。

「懺悔室ならこのドア入った先にありますよ」

入口すぐ左のドアを指して言う。敬語なんてのは使いにくくて仕方ないが一応相手は信徒、雑に扱うわけには行かない。しかし彼女はそちらを向くこともなく、じつとこちらを見つめている。

「あなたがいい」

「……私は修道士ではありませんが」

「あなたじゃなきゃダメなの！ ちよつとくらい付き合つてよ！」
容姿から落ち着いた性格かと勝手に予想していたが撤回、どうやらとんだじじや馬に目を付けられたらしい。別に無理矢理部屋へやつてもいいんだが……

「分かった、こつちに座れ」

「それでいいのよ」

信徒席に座るよう促してやる。どうせ暇していた所だ、聞くだけは聞いてやろう。態度が大きいのだけ気に食わないが。

「で、お前の名前は？」

「シエラ・ルーンクラークよ。流石に知っているでしょう？」

「……ああ、あその出身か」

少女の出生を聞いて多少ながら驚く。ルーンクラーク家と言えばこの辺り一帯を治める貴族の名門だし、その家系からは優れた音楽関係者を多く輩出していることでも知られている。確か現当主のハンゼ氏は国内随一のピアニストだし妻のシエリル氏もオーケストラの指揮者を務めていたはず。噂じゃ子供たちにも英才教育を叩き込んでると聞か。

「俺じゃないとつてことは、音楽絡みか」

「ええ」

少女は頷くと、一通の封筒を取り出す。今夜開かれる演奏会の招待状だ。演奏者はみな若くして頭角を現している一流ピアニストたち、その最後にシエラの名があつた。

「今日が最後のチャンスなの」

「最後？」

便箋から視線を起こすと、少女はスカートの裾を握りしめて震えている。心なしか何かを堪えている様にも見えるが。

「お姉様たちは初めての演奏会で大成を治め、今では国内あらゆる場所まで活躍してる。でも私は何度も失敗した。毎日厳しいレッスンを受けてるのに、必ずどこかで失敗する」

「……ああ」

「だから一昨日言われたの。『明後日の——つまり今日ね——演奏会がもし失敗したなら、お前は二度とピアノを弾かなくていい』つて」

「どうやら俺の予想より、彼女の悩みは遥かに深刻らしい。そりやそうだ、音楽の名家に生まれ、家のために十数年も過酷な教育を受けながら「ピアノを弾かなくていい」とは最早自身の価値を否定されるに等しい。実際はそこまで厳しくないとしても、彼女はそう思っている」

「……いや、俺の手に負えるレベルじゃねえぞこれ。正直今すぐここから抜け出して神父様あたり呼ぶのが正解なんじゃねえのと思つたところで、彼女と目が合う。一見して分かる程にその瞳は潤んでおり、心なしか臉も赤い。考えてみれば大事な演奏会の直前に抜け出すなんてとんでもない事をやらかしてまでここまで相談に来たんだ。バレたら説教じゃすまないだろう。なのに……」

「……なんか弾いてみる、聞いてから考える」

「分かったわ」

「とりあえず聞いてからだ。音楽の悩みを解くのは、実際聞いてからでも遅くはないだろう。手を取って壇上まで連れていく。倒れないように注意を払いながら」

「やるわよ」

「ああ」

彼女に合う高さの椅子を用意し、準備は整う。楽譜はいるかと聞

いたところ不要と言われた、恐らくはもう覚えているのだろう。

白鍵の上に指を掛け、その両手が目にも止まらぬ速さで曲を奏で始める。確か作曲者が戦争を嘆いて書いた代物だったか。鍵を往復するのは一秒間に四回か五回か、俺じゃ到底弾けないレベルの超絶技巧。どの音が間違ってるかなんて聞き分けられないだろう……そう思った刹那、少女は演奏を止める。僅かに震える肩、荒くなる呼吸。一分経たずともこれほど疲労するのは、彼女の不摂生が原因ではないだろう。

「どうした？」

「……間違えたの、第二十八小節。ちよつとでもずれたら即やり直したから、いつもの癖で」

「そうか、一応何かやってくれ。上手く行くかもしれないから」

「ええ……」

しかしその後何度挑戦しても、彼女は何らかのミスを犯した。同じ場所で失敗することもあれば、以前は成功した場所で何故か失敗することも。その度彼女は演奏を止め、自分を責める。そんな繰り返しの果てに——

「——なんなのよもうっ！」

力任せに振り下ろした両手の下、六つ七つの鍵盤が聞くに堪えない不協和音を上げる。しかし少女は構うことなく、何度も手を下し続ける。一応それ俺の楽器なんだがと告げようとして、

「なんでなのよ……なんで私だけ……」

少女が涙を流しているのに気付く。……そもそも楽器を乱雑に扱うなんて真似、彼女の家でやったら説教通り越して絶縁さえあり得る。だったら俺よりも厳しい指導者の下で失敗を重ねる彼女は、どんな気持ちだったのだろうか。泣くことさえ許されず、ただ耐えるしかなかった今までのツケが、ここで一気に爆発したとすれば。この不協和音はまるで彼女の悲鳴のようだ。

「……おい、ちよつと待て」

不意にある考えが脳裏を過る。一見して無茶苦茶な、けどこの状

況を解決できそうなアイデアが。

「なんなの」

「お前今、だいぶ苛ついてるよな」

「見て分からないの？」

予想通り。この精神状況とこの曲調なら……

「ちよつと思いついたことがある。その曲をもう一回弾いてくれ、今から言う二つを守って」

「二つって何よ」

怒りと焦りの声音に混ざる、僅かな期待。この様子なら多分大丈夫だろう。

「一つ、何処かで弾き違えても演奏を止めるな。最後までやり切ってくれ」

「ええ、それは分かったけどもう一つは？」

「今お前が感じてるイライラとか悪い気分全部叩き付けるくらい、全力で演奏しろ。最悪こいつを壊してしまっても構わん」

「感情のままに、ってこと？」

「ああ」

なんでそんなこと、と呟きながらも彼女は準備を始める。半ば捨て鉢になっているが、むしろその方が都合だったりする。そうしているうちに彼女はピアノに手を掛け、最後の演奏を始める。

以前までと違い、手加減のない全力。所々に不協和音が混ざり、耳を覆っても耐えられなさそうな音圧が聖堂全体を震わせる。奏者の表情は鬼気迫り、まるでこの世全ての恨みをぶちまけるよう。何があっても止まらない、最早誰にも止められない。暴風雨を思わせる二分三十秒は、高らかに響き渡る和音を持つて幕を閉じた。

何処からか聞こえてくる拍手の音。俺と少女が後ろを振り返ると、多くの信者と修道士が並んで彼女を称えていた。

「え、ええ？」

二人だけだと演奏していたらこんなに多くの人間、年相応の少女に戻った彼女にその衝撃は強かつたらしく耳まで朱に染まっている。人混みの中から神父が抜け出し、俺の元へと歩む。

「随分派手にやってくれましたね、音が凄くて懺悔どころではない」「すみません、しかし」

「事情は大体予想がつきます。それにこんな心を打ち付ける演奏、滅多に聞けるものではありません。街の皆さんもお喜びだ」

そう言われ後ろを見ると、確かに拍手をくれた聴衆は皆笑顔。それだけ彼女が人々に迫れたのだろうか。

「さあ、私たちは戻りましょう。君も最後まで付き合っただけがなさ

い」

「ええ」

懺悔室へと神父様たちが戻り、再び俺と彼女の二人だけが残される。さっきの演奏を聴いて答えは出た、後はそれを告げるだけ。赤く染めた顔で俯く彼女に、結論を切り出す。

「シエラ、お前に正確な演奏は向いてない」

「……え？」

俺の言葉に顔を上げる少女。そもそも最初に会った時点で怒りや悲しみがある程度分かるくらいには、彼女は感情豊か。心を殺して進める完璧な演奏はまるで似合わない。

「だがな、失敗を考えず感情のままに行う演奏は人の心に届く。多少のミスよりもな、お前がどれだけ真剣で一生懸命かっただけはここにいた全員が理解できた」

「……」

「だから今日の演奏会、全力でぶつかってみる。怒りでも恐怖でも喜びでも楽しみでもいい、何か一つ客に伝えたい感情をピアノにぶつけてみる。それで大丈夫だ」

「本当に？」

「ああ」

暫しの沈黙、しかしその間に彼女の気持ちはまとまったようで。

「ええ、全力で……心に正直にやってみるわ。その後はどうにでもなれ、よ！」

少女の進む道を示せて、無事一息つく。決断を出来た人間は強い、今の彼女なら間違いなく大丈夫だ。

「だったら早く戻った方がいいぞ、時間は限られてるんだから」

「そうね、今日はありがとう！」

手を振って立ち去る彼女を見送り、俺は椅子に腰かける。試しに押してみた鍵盤からは……まともな音が聞こえなかった。

「本当にぶっ壊すか」

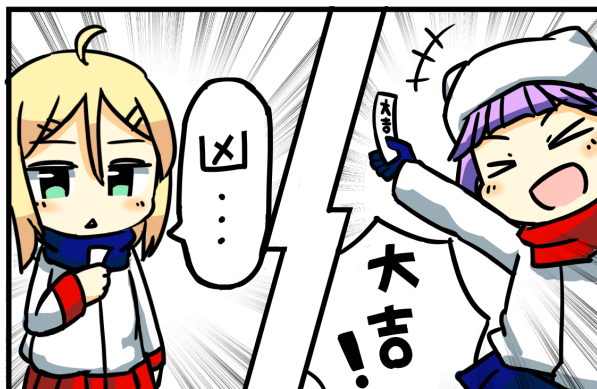
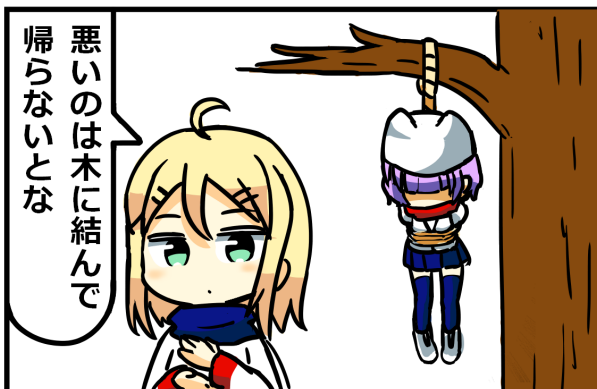
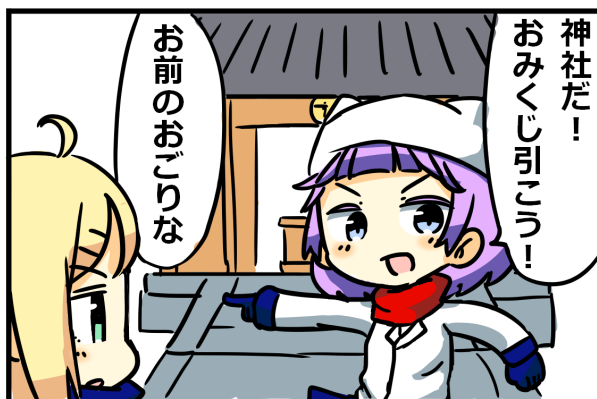
確かに壊してもいいとは言ったが、何も律儀に守らなくてもいいだろう。しかしまあ、どうせこれからも暇だ。所々古くなつてたピアノを大修理するのも悪くない。

「となればまずは弦の調達か……長くなるな」

現在十二時、未来の名奏者がその名を響かせるのはもう少し先のこと。

了

～新春猫にゃん劇場～





長髪
の毛
切りすぎた！

か
.
.
.

massun

箱にっつ
色でっつ
めんがたっ
まかし
こ

ちげ





As you like.

箱庭氏

あとがき

編集終わったああああああああ

遅れて本当にごめんなさあああああああ

あ、編集を担当しております「きな粉もち」でございます。『ご
がらしのつき』を見てくださりありがとうございます。

今回編集を大体一人で行いましたが・・・すつごく疲れまし
た!!!まじかよこんなに疲れるのかよおおお・・・それとも
単に私に体力だとか精神的なものだとかが少ないだけなのか!?
どちらにせよ自分に力的なものがないのは事実なのでもっとなん
かいろいろ頑張りますほんとうに遅れてすみませんでした。改めて
いままで編集を担当していた人を尊敬しますよほんとに・・・。

いつかのあとがきに「余裕があれば小説を書いてみたい」と書い
たのですが、いざ書こうと思うと見事に何も浮かびませんでした泣
きそう。

「なんにもないところから創り出すことは難しい」とはこれまで
いろんな所でいろんな人に何回も聞いていますし、本を読んでいて
もテレビを見ていると誰かしらがそんなことを言っています。

もちろんそれが嘘くさいだとかは全く思っていませんし自分でも
ちゃんと理解しています。ただどこまで何も思いつかないとなる
ともう何というか笑えてきますよ・・・。

そりや自分の感性だとか語彙力だとかに問題があるのだろうかと思
いますけど・・・自分で書いていて悲しくなってきた泣きそう。
こういうのは「どうやっているの?」っていろんな人に聞いたと
してももれなくいろんな回答がこえてきますし、中には「特に方
法とかがない」っていう人もいますし・・・。そもそも教えてもら
った方法が自分に合わなかったとしたらいくら頑張っても無理だと
思うし・・・。

・・・まずはもつと本を読むべきですかね・・・。

書くことがなくなってきた・・・。

あ、改めて『ごがらしのつき』を見てくださりありがとうございます。
ます。次はもつと良い編集ができるよう努力します・・・。

きな粉もち